

ウェブチュートリアル「KITIE」の活用： 大学における情報リテラシー教育の実践タイトル

市古みどり
慶應義塾大学信濃町メディアセンター

概要：慶應義塾大学図書館は情報リテラシー教育に取り組んできている。その結果としてウェブチュートリアル KITIE の開発や、図書館員による授業科目「資料検索法」が実現した。それらの取組みの経緯や現状を説明する。

キーワード：KITIE、情報リテラシー教育、IL、資料検索法、PATH

1. 情報リテラシー教育の目標設定と KITIE の作製

情報リテラシー教育にはさまざまなレベル、方法、段階がある。このため情報リテラシー教育の組織目標を設定するために、大学教育や大学図書館の変化の必要がある。大学教育の変化としては、大学進学者数、初年次教育への関心、生涯学習者、留学生獲得、IT を活用した教育、カリキュラムや教育方法の変化、海外有名大学のアジア進出、大学の自己点検強化などがある。図書館の変化としては、ネットワーク化、電子資料の増加、利用者行動・要求の変化、レファレンス質問の変化、業務の委託化、予算やスタッフの減少などがある。こうした中で図書館は引き続き利用者に貢献できる存在か、学生や教員は何を図書館に望んでいるのか、あるいはこれからの図書館員の役割について考えてきた。

慶應義塾大学の5つのキャンパスにあるそれぞれの図書館は、そのキャンパスに属する学生のための図書館の利用法や文献の検索方法の教育に早くから取り組んできた¹⁻³⁾。情報リテラシー教育という考えで取り組み始めたのは日吉キャンパスで、1997年に新生全員に対して「情報リテラシー教育」を実施することを目標に取り組みが始まった。その経験の蓄積とインターネットが普及した結果、2004年に情報リテラシー教育のためのウェブチュートリアル KITIE の開発が実現した。KITIE は公開後、日吉や湘南藤沢キャンパス（SFC）で行われている授業やデータベース検索セミナーのテキストや補助資料として利用されている。

KITIE の作製時にいくつかの工夫を行った。プレテスト、ファイナルテストを設け、それらの問題の入れ替えを容易にし、さらに、問題の順番はアクセスごとに変化するようにしたほか結果の集計もできる。また、KITIE は米国大学・研究図書館協会

（ACRL）の基準に準拠しているため、その目標を意識して各章の目標を設定し、各章の終わりに確認のためのコンテンツを置いている。さらに、クイズやアクションラーニングを用いることによって硬いコンテンツを少しでも遊びながら読み進められるようにした⁴⁻⁸⁾。

2. 授業「資料検索法」の概要

KITIE は SFC の授業科目である、「資料検索法」でも活用している。また、KITIE の作製後に開発した「PATH」という大学生生活に入ったばかりの学生により親しみやすく大学での学びを体感してもらおうと作製したチュートリアルも利用している^{9,10)}。資料検索法の目標は、「大学における学習や研究において、必要な情報に適切かつ効率的にアクセスし、法的・倫理的に正しく入手し、それらを評価し取捨選択しながら活用することができるようになること」とし、自分で考えて判断し行動を起こす力をつけるための「情報リテラシー」を身に付けられるような内容としていくことを目指している。

この授業は総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部の学生1年生から4年生までが受講可能である。SFC 開設当初から存在していた授業であり、2003年までは図書館・情報学の教員が担当していた。日本に限らず海外においても、大学のカリキュラムの中に図書館員が入り込んで聞くことは困難な状況であるが、幸いなことに2004年からは図書館員のみで半期2単位の授業を行っている。

SFC のカリキュラムは2007年に大幅な改訂が行われた。資料検索法は、「創造支援系科目」の下にある「創造技法科目」の中の「ナレッジスキル」という科目の一つをなすものとなっている。講義概要によればナレッジスキルとは、「SFCでは、問題解決能力のみならず、問題発見能力を磨くことを大きな目標

として掲げています。世の中の色々な問題が複雑に絡み合っており、その中から本質を見失いがちになるとき、その中から解決すべき問題を発見し、解決する能力が強く求められています。ナレッジスキル科目は、このような要求に答えるために、問題発見から問題解決に至るスキルを身につけるための科目群です(以下省略)」ということで、情報リテラシー教育そのものであると考えられる。また、ナレッジスキル科目は、2007年度以降の入学において、3年生から4年生への進級要件(必修単位数:4単位)となっている。

3. 「資料検索法」のアウトラインと方法

2007年度春学期は麻疹の流行により全12回の授業となった。授業の構成は次のとおりであった。1回:オリエンテーション、2回:情報の種類と特徴、3回:情報の収集(1)、4回:情報の収集(2)、5回:データベース紹介(1)、6回:資料の入手方法、評価方法、7回:演習課題1・2の解説、8回:データベース紹介(2)、9回:法令・判例の探し方、10回:情報の活用方法、11回:演習課題3・4の解説、12回:レポートの書き方、まとめ、自己評価。講義資料は授業のサイト¹¹⁾およびSFCで開発された学事システム上に掲載し、ほぼ毎時間後復習的な内容の小テストを実施した。この小テストにはフリーのアンケートシステムを利用している¹²⁾。

この授業の中では細かいデータベースの使い方はほとんど説明しないが、実習はところどころ取り入れた。大教室での授業のため、同時アクセス数の制限のあるデータベースや一斉に無線LANを使うことで通信速度が遅くなるといった障害もあるが、演習時には個人のパソコンを持参することを授業の条件としているため、こうした一般教室での実習も可能となっている。小テストとは別に、演習課題を4問作り、レポートとして提出させている。さらに最終課題として授業の初回から検索テーマとしてきた自身のトピックについて5,000字のレポートを提出させた。期末試験は行っていない。出席点、課題の提出により最終評価を行った。

4. 「資料検索法」の履修者

2007年度春学期は、1年生160人、2年生74人、3年生43人、4年生47人が履修した。毎回の授業出席者数は200人前後で、最終

レポートを提出したものは236人であった。KITIEのプレテストの結果は、A判定(全問正解)は4人、B判定(16-19問正解)が32人、C判定(10-15問)が84人、D判定(9問以下)6人という結果であった。履修申告前の実施であるので解答数は履修者数より少ないが、この結果は2006年度とほぼ同じであった。

小テストの解答は毎回150人前後であった。小テストの目的は各回の理解度を講師側が知るためにあるいは、復習として実施した。しかし、最後の小テストで、誤解答の多かった問題を再度出題した結果、正答率の向上はみられなかった。最終授業では自己評価をしてもらった。設問は、1.情報の存在場所に勘がはたらくようになったか。2.的確なデータベースが選べるようになったか。3.検索技術が向上したか。4.検索の結果を評価できるようになったか。5.検索の結果を活用できるようになったか。6.資料をきちんと整理できるようになったか。7.総合評価、というものであった。学生が難しいと考えていることは、データベースの選択、検索結果の評価、資料の整理であった。検索テクニックは向上したと感じているようであった。やはりテクニックは、学生には修得が比較的しやすく、教える側にも苦勞が少ない。学生は資料を活用できるようになったと感じていたが、最終レポートの評価で明らかになったことは、引用すべきところで引用していない、指定した引用方法に従っていないことであった。引用方式については、ハイフンやコンマといった細かい記述は一切問題とせず、引用の要素をきちんと理解しているかについてだけに注視した。

最終課題である5,000字のレポートは、単に自分の考えを一方的に述べたもの、感想文が多い、あるいは、調べたことだけを羅列したものも多かった。しかしながら、この授業の中で論文の書き方については手順のみ触れただけであったことを考えると、このレポートは授業の目的と内容に必ずしも合致していなかったのではないかと考えられ、次年度の授業向けの課題である。

5. 「資料検索法」の課題

この授業の補助教材として利用しているKITIEについては、各章に設けた目標の設定が適切であるか、コンテンツ自体の精査、維持・管理が当面の課題である。さらに、こ

の授業によって学生の情報リテラシー能力がどの程度向上したか、身についたかを確認する方法を確立したいと考えている。KITIEを作製した時には各章に設けた目標について十分な検討をしておらず、今後情報リテラシー教育の評価に踏み込むとすれば、妥当な目標を立てるためにその方法論を教育学の手法から学び、授業の目標を再設定する必要があるだろう。

コンテンツについては、情報検索が Google Scholar の浸透などによりますますブラックボックス化することが考えられ、そうした中から利用者が情報を効率的に的確に探し評価する方法について学習できるように改良を加える必要がある。授業を担当することについての課題としては、講師の確保と育成、講師自体が修得すべき教授法、さらに情報リテラシー教育の評価法の研究と評価を実際に行い、授業を改善していく方法を見出さなくてはならない。

現在の「資料検索法」の限界は、学生が提出した最終レポートに現れている。レポートの書き方についての指導は他の教員に委ねるしかないが、いずれはそういった授業の中に「資料検索法」が取り込まれ、図書館員と教員との協力関係で授業が成り立つ形となれば、より効果的で図書館員としても取り組みやすくなるのではないかと思われる。

参照 URL 等

- 1) 市古みどり, 上岡真紀子, 情報リテラシー能力を高めるためのウェブチュートリアル KITIE (Keio Interactive Tutorial on Information Education) の公開, Media Net12: 49-53, 2005.
- 2) 市古みどり, KITIE の旅立ち, 慶應義塾日吉図書館開館 20 年記念誌, 慶應義塾大学日吉メディアセンター編, p.26-28, 2006.
- 3) 市古みどり, 上岡真紀子, 情報リテラシーのためのウェブチュートリアル 開発: KITIE (Keio Interactive Tutorial on Information Education) の事例, 医学図書館 54 (1): 37-41, 2007.
- 4) <http://project.lib.keio.ac.jp/kitie/pretest/01.html>
- 5) <http://project.lib.keio.ac.jp/kitie/write/index.html>
- 6) <http://project.lib.keio.ac.jp/kitie/write/summary.html>
- 7) <http://project.lib.keio.ac.jp/kitie/write/quiz/01.html>
- 8) <http://project.lib.keio.ac.jp/kitie/search/basics/25.html>
- 9) <http://project.lib.keio.ac.jp/PATH/>
- 10) 上岡真紀子, マルチメディアチュートリアル PATH の作

製, MediaNet13: 11-13, 2006.

- 11) <http://info-literacy.sfc.keio.ac.jp/>
- 12) UCCASS
<http://www.bigredspark.com/survey.html>